
ヨゼフ・ピタウ先生とアジア人材養成研究センター

—グランド・レイアウト第1号、アジアへ出かけてソフィア・ミッション—

石澤良昭
上智大学特別招聘教授
アジア人材養成研究センター 所長

I アジア研究の拠点「アジア文化研究所」の設立

1. イエズス会3神父がはじめた AUVIT 学生交流会 (1960-1965)

—アジア地域とのかかわり・その1—

上智大学と東南アジアとの学生交流は1960年に始まる。当時のイエズス会の3人の神父、日本ではリーチ (P. Riestch) 上智大学教授、バンコクではゴマンヌ (Gomane) 神父、サイゴン (ホーチミン市) ではラル (Larre) 神父が「オーヴィット (AUVIT=Amitié Universitaire entre Vietnam-Japon-Thaïlande)」という任意の学生交流の団体を立ち上げた。その第1回の学生交流は1960年に上智大学から出発した。フランス語学科の3年生、4年生の私たち学生に、リーチ教授からベトナムの大学で集中講義をするので、「一緒に来ないか」とのお呼びがかかった。そのリーチ教授は私の最も敬愛するフランス人のイエズス会の神父さんであった。

そんなリーチ教授の誘いに応じたのは、私を含めて上智・東大・慶大の7人の学生であった。私たちは、まず大泉孝上智大学長 (1953年-1968年) から日本銀行の外貨申請書に印鑑をついてもらい、渡航手続きを開始した。教授は「これからはアジアの時代になる。今のアジアの現実をしっかりと見ておきなさい」と言われたが、私たちは一種の海外旅行気分で浮かれていた。教授の炯眼はさすがであった。その4年後の1965年 (~1975年) からベトナム戦争がはじまり、ベトナム戦争のため、アメリカ軍がタイの軍事基地使用開始 (1964年)、カンボジアの国内混乱と内戦が1970年 (~1993年まで) から勃発した。

1901年からアンコール・ワットなどの遺跡を修復してきたのはフランス極東学院のフランス人専門家たちであった。

2. インドシナ難民に愛の手を—上智大学の教育理念の具現化

—そしてアジア地域とのかかわり・その2—

上智大学は、ピタウ学長在任中 (1975年-1981年) に本格的なアジアとのかかわりの第一歩を踏

み出すことになった。

先ず、ピタウ学長は1979年12月にインドシナ難民を助けるため新宿駅東口の駅頭に立って、道行く人たちに募金を呼びかけた。1979年秋ごろから学内では、教職員や学生の有志によって自発的にインドシナ難民の救援募金活動が行われていた。これに対して、ピタウ学長は、大学主催での募金活動を実施すべく、同年11月28日の大学評議会にこの件を提案した。全学がこれに賛成し、「インドシナ難民に愛の手を」のボランティア活動が決議された。

大学主催の決定を受け、「インドシナ難民に愛の手を」委員会が発足し、本格的な募金活動がはじまった（『上智大学通信』昭和54年（1979年）12月14日発行より）。

3. 人間の悲劇と尊さ ―無心の愛に支えられたボランティア活動から―

現地へのボランティアの派遣は、同年12月に新宿の街頭に立った学生たちから強い要望があり、実施することになった。ピタウ学長と教職員代表は同年12月下旬から1980年1月上旬にかけてそれまでに寄せられた義援金を携えて現地を訪れた。

ボランティアの派遣先はタイ国内にあるサケオ難民キャンプ内にあるチルドレン・センターであった。そこには、帰るところがない子供たちが助けを求めているので、学生ボランティアの派遣が決まった。

さらに、ピタウ学長は有志のみなさんと共に、同年1月に、生命の危険にさらされているカンボジア難民の現地報告会を聖イグナチオ教会において開催した。これがマスコミにとりあげられ、多くの日本のみなさんが、救援活動に参画いただいた。

募金についての問い合わせや、ボランティアを希望する学生の電話があいついだ。集まった募金は現地のカトリック緊急難民救済事務所（COERR）、日本奉仕センター（JVC）、日本赤十字社等へ送金し、難民の人たちの教育施設、教材、医療、食糧等のために使われた。

一方、本学の現地ボランティアは同年2月3日に第一陣が出発し、以降2週間の交替で、1グループおよそ10名の編成で出発した。ボランティアには、学生たちが参加した。しかしながら、同年4月上旬、タイ国軍部は、チルドレン・センターの子供たちを難民の人たちが里親として引き取ることにしたので、同センターの閉鎖を通告してきた。ボランティアの派遣延人員は152名に達し、そのうち本学教職員18名、学生67名であった。



ヨゼフ・ピタウ元学長と筆者、ロヨラハウス於2012年1月

この現地ボランティアの派遣に際し、ピタウ学長は「ボランティアとは自分の資金で無償で奉仕することが建前」と強調、また、出発を前にしたボランティア諸君に向かって「皆さんは愛を与えるのではなく、受けるでしょう。教えるのではなく教えられることでしょう」と語りかけた（『上智大学通信』昭和55年（1980年）10月23日発行より）。

4. ピタウ学長は「アジアと協力し、新しい世界を築く」 —1980年ピタウ学長年頭あいさつ—

「今年は80年代の最初の年になりますが、これから上智大学はどのような道を歩むべきか。「量より質」、それは私たちの今まで一つの基本的な方針でしたが、これからもそれを強く打ち出したと思います。この80年代、私たちの夢であった中央図書館も完成するでしょう。そこで、学問的雰囲気をも高める、精神的なものを深めるということは、私たちの今後の課題であると思います。第2に上智大学の建学の精神を考えてみますと、この永遠の価値のための教育を与えるべきでありましょう。第3に私の一つの大きな希望ですが、今までどちらかという上智大学は西洋に目を開いて、西洋中心に国際性を強調してきました。これからの80年代ではアジアを中心にしながら、アジアを理解し、さらにアジアと協力して新しい世界を作るという使命があると思います。つまり国際性の意味を再考する、その意味で4年前に立てた10年計画の中にアジア研究を強化するという項目が盛り込まれています」(『上智大学通信』昭和55年(1980年)1月23日発行より)。

5. 1980年上智大学評議会が「アジア文化研究所」の設置を決定

上智大学は1980年5月の理事会においてアジア研究体制(具体的にはアジア文化研究所設置構想)について具体化を承認した。時系列に従ってその具体的な設置の手続きをたどってみたい。

(1) 大学評議会(1980年6月25日)の議題として「アジア文化研究所(仮称)設置案」が諮られ、ピタウ学長からその構想案が述べられた。討論の後、設置の主旨を承認の上、準備委員会(橋口委員長)を設ける等具体的準備活動に入ることを承認した。

(2) 「アジア文化研究所(仮称)」設立準備委員会第1回会合(1980年9月30日)

(準備委員会委員長からの説明) 中国・朝鮮、大陸部東南アジア(タイなど)……すでに本学には研究の蓄積がある。スタートする場合に、既存の研究組織において欠けている分野を当面は考えていきたい。例えば、イスラム研究を目的の中心とする。アフリカも含むことになるかもしれない。歴史・宗教などの人文系社会科学系研究に重点を置く。国としてはフィリピン、インドネシアは含まれるがイスラムが中心である。中国やタイを入れないのは現時点で既存の研究が進んでおり、将来は含めてもよい。新地域を挙げたのは新鮮味を持たせるためでもある。(委員長の補足説明1980年10月3日、イスラム中心というのは説明不足であった) 地域研究としてフィリピン、インドネシア、西南アジアを3本の柱とする。将来は中国等を包含する。

(3) (委員長から)ピタウ学長に対して構想の具体案を説明(1980年10月7日)

(4) 「アジア文化研究所(仮称)」設立準備委員会第2回会合(1980年12月4日)

委員長が同研究所設置案を提示。

① 設立趣旨：

東アジアの一隅において、キリスト教的ヒューマニズムを基礎として、東西文化交流を念願する本学の建学の理念に鑑み、近隣友邦たるアジア諸地域の宗教・言語・社会・歴史等を総合的に調査研究し、必要な教育活動を行うことの重要性が、今日ますます高まりつつある。そのため、将来恒久的に本学の特色の一つとなるようなアジア諸地域の文化およ

び社会に関する研究、とりわけ、その地域の伝統文化、伝統的生活様式についての専門的研究を行う、さらにその理解の上に、現代の社会・文化諸現象を把握することを目指した研究機関の設立が望まれる。このような研究機関を設立し、アジア諸地域との学術文化交流を図り、また研究、交流の成果を世に問うことをもって、アジアのみならず世界の平和と発展に寄与しうることを期して本研究所の設立の趣旨としたい。

② 設置計画、研究対象：

広くアジア諸地域、とりわけ当面はフィリピン、インドネシアおよび中東における社会、文化現象を、従来の学問の専門領域や国境にとらわれることなく、総合的、学際的、国際的に把握する。特に本研究所では基礎文化（ないし常民文化）と外来文化との関わりを主たる問題関心とし、たんなる個別地域の歴史・文化研究だけを行うのではなく、また、たんに現代国際関係、現代の社会経済問題のみを研究対象とするのではない。分野としては、文化、歴史、宗教、言語の研究、イスラム研究はこの一部となる。

(5) 「アジア文化副専攻（仮称）」の開設

（委員長から）ピタウ学長に対してアジア文化研究所（仮称）の概要の説明（1981年2月12日）「できれば将来的に、①アラブ（イスラム）文化圏 ②東南アジア（ASEAN＋インドシナ）③漢字圏（中国、朝鮮）という分野を研究したらどうか。いつかイスラム研究を通じてアフリカについても考えることができるだろう。」（ピタウ学長の言葉）

「アジア文化副専攻（仮称）」新設の件については、アジア文化研究所の1982年4月の発足に伴い、外国語学部教授会がこの設立を受け入れ、「アジア文化副専攻（仮称）」の設立が承認された。国際関係副専攻からは、アジア文化副専攻の教員人事やカリキュラムを独自に進めることのできるアジア文化副専攻が設立されることが、アジア文化研究所の発展のためにもなるので、教育のコースとしても開設のあかつきには、独立させた方がよいとの意見があった。

(6) 大学評議会（1981年2月18日）において上智大学アジア文化研究所規程が承認され、アジア文化研究所運営準備委員会（設立準備委員会が昇格し改編した委員会）を、外国語学部教授会内に設置承認（1981年12月17日）。国際関係副専攻の了解（いわゆる軒貸し）および外国語学部が同研究所の設立母体になることを承認。1981年4月に学長に就任した柳瀬陸男新学長（1981年-1984年）に対してアジア文化研究所の設立とアジア文化副専攻の開設を報告（1981年4月17日）。柳瀬陸男学長からは中国・朝鮮を含むというのは理事会の方針ではない。イスラム研究はお願いしたい旨要望があった。柳瀬陸男学長が兼務ではあるが初代アジア文化研究所長に就任された。

6. アジア文化研究所内に「アンコール調査室」を開設（1992年4月1日）

本学は1979年からインドシナ難民の救済活動に取り組んできた。1982年に設立されたアジア文化研究所には、鹿児島大学から石澤所員が移籍し、カンボジア問題とアンコール遺跡の問題についてたくさんの情報が集まっていた。

1980年代後半からカンボジアでは、平和構築に向けて作業がはじまり、国交回復、国連カンボ

ジア暫定統治機構（UNTAC）、日本のPKO自衛隊第1陣到着など、マスコミは連日カンボジア報道に終始した。日本では平和になったらアンコール・ワットを訪ねたいとの世論が盛り上がり、同時にアンコール・ワットの保存・修復は日本人の手で、という産・学・官の有志が集まりアンコール・ワット救済の任意団体が結成された。ヘンサムリン政権文化省と接触のある本学が中心的な役割を果たすことになった。

正式には1991年4月17日に産・学・官の有志により「アンコール遺跡救済委員会」が設立され、会長に石川六郎氏（鹿島建設株式会社社長）、事務局長に石澤アジア文化研究所長、同補佐に遠藤宣雄（東洋エンジニアリング株式会社人事部長）、監査役に酒井幸弁護士が就任した。同顧問に就任した大谷啓治学長（1993年-1999年）の指示により、アジア文化研究所内に同委員会の事務局を担当する「アンコール調査室」（1992年4月1日）が開設された。

同委員会には個人の資格とはいいながら、外務省・文化庁はじめマスコミ各社、ゼネコンなど約65社が参加し、同年4月29日から5月3日にかけて同委員会を中心に「アンコール遺跡救済日本代表団」31名がアンコール遺跡調査のため現地カンボジアを訪れた。代表団は一部倒壊したアンコール・ワットなど主要な遺跡の目視を行った。

II アンコール研修所（1996年）からアジア人材養成研究センターへ

—「グランド・レイアウト」第1号の新センター開設—

1. 現地カンボジアに上智大学アンコール研修所の建設（1996年）

カンボジアでは1970年から24年間にわたり内戦が続き、都市住民約100万人の追い出し、知識人の虐殺が約150万人、そして約200万人が難民となった。

前述の通り、上智大学は1979年に新宿の駅頭で「インドシナ難民に愛の手を」募金を開始した。そして内戦中の1980年代からソフィア・ミッションの人たちがカンボジアへ出かけ、現地にカンボジア文化復興のための「アンコール研修所」（1996年）を建設した。アンコール・ワットはカンボジア民族の栄光の歴史の証人であり、24年間の4派内戦の結果和解の共通課題は「アンコール・ワットの昔に戻って話そう」であった。アンコール・ワットこそはカンボジアの皆さんが勇気と元気と希望を取り戻す心の拠り所であった。ところが、知識人虐殺のため1980年に生きて現場に戻ってきた保存官は3名のみであった。そのアンコール・ワットを守る保存官がゼロとなってしまった。私たちは「カンボジア人の手によるアンコール・ワットの保存・修復」を国際協力（ソフィア・ミッション）の哲学に掲げ、4派が和解に向けて共通テーマとするように、その修復を提案したのであった。



カンボジアのアンコール研修所設置 1996年8月

上智大学アンコール研修所は敷地 4,800 m²、研修所母屋 282 m²、倉庫 36 m²である。住所はカンボジア王国シェムリアップ市トレファン地区である。開所式は(1996年)8月29日午後4時にヴァン・モニヴァン国務大臣など関係者80人が列席し、大谷啓治学長が式辞を述べた。

近くの寺院から僧侶6人を招き、カンボジアの伝統儀式にのっとり厳かに執り行われた。

この研修所は、アンコール・ワットから約2.5kmのところであり、シェムリアップ川沿いの果樹林に囲まれた閑静な場所にある。近くにはカンボジア王国政府文化芸術省のアンコール遺跡保存事務所やフランス極東学院がある。

建設の総経費は約3,000万円余り、朝日新聞、東京海上火災キャリアサービス、(株)資生堂、(株)求龍堂および個人の篤志家などのご厚意により全額寄付金により賄われた。建設の目的は、カンボジア人保存官の人材養成を実施するため、若手研修生と教授陣が泊まり込んで、数ヶ月にわたり調査・研究や講義・製図・実習などができる施設が必要であった。2002年10月にアンコール研修所はこれまでのソフィア・ミッションをさらに発展させるため、名称をアジア人材養成研究センターに改称し、「グランド・レイアウト」第1号の新センターとして発足設立されることとなった。

2. 上智大学教育・研究・キャンパス再興「グランド・レイアウト」(第1期(2001年-2005年))

とは何か

アジア人材養成研究センターは2002年10月にアンコール研修所を改組して設立された。上智学院理事会はキャンパス再興「グランド・レイアウト」第1期(2001年-2005年)新ホフマン計画の第1号として新センターへと発展したのである。

2001年5月、上智学院理事会は創立100周年(2013年)に向けて「上智大学 教育・研究・キャンパス再興グランド・レイアウト」を学内外に発表した。①優位性・独自性を樹立する。②国際的評価を受けるに値する高等教育機関になる。③キャンパス・ライフの環境条件を整備充実させる。④21世紀を見据えた教育研究体制を確立するための組織・職制・人事計画を整備する。ことを掲げた。そして理事会は、「グランド・レイアウト」を推進し、実現するために「長期計画企画拡大会議」を設置した。「グランド・レイアウト」第1期(2001年-2005年)で実現した新ホフマン計画の第1号は「アジア人材養成研究センター」であった。

本学の「グランド・レイアウト」は、本学が取り組まなければならない新たな課題が多くあることを認識し、困難な環境を「可能な限りプラスに捉え、恒常的な自己変革体制を構築」し、「厳しい状況変化のなかで、キリスト教精神を土台とした上智大学創立当初からの理念を踏まえつつ、新しい世紀に向け、自由をもたらす真理と福音的正義に基づいた一歩」をさらに踏み出さなければならない(『創立100周年(A.D.2013)上智大学教育・研究・キャンパス再興グランド・レイアウト第1期(2001年-2005年)、第2期(2006年-2010年)に向けて』2006年1月25日版より収載)。

3. アジア人材養成研究センター設置の趣旨

(1) 設置の目的：上智大学アジア人材養成センター（以下センター）は、アジア現地に暮らす人たちの自立を援ける人材養成センターであり、同時に、アジア現地から学び、そこに住む人々との協働作業（調査・研究・現場実習など）を通じて地域に機能し、存続する村落・環境・開発・生態および歴史が塗布された文化遺産などの新しい地域研究と自国研究を行い、各学部および大学院各研究科等と密接に協力しながら、アジア研究、中でも東南アジアや南アジア等を研究する大学・研究機関・博物館・現地の行政機関と提携する。本センターは、人材養成とそこから生まれる密度の濃い地域研究を基軸に置き、地球世界にアジア世界に貢献することを目的とする。

設置の形態：上智大学長のもとに、「センター」を置く。センターは、本学学則第6条に定める「附置教育研究機関」とする。

設置の場所：センターは、カンボジア王国シェムリアップ州（Phum Treang Slokram, Srok Siem-Reap, Siem-Reap Province, Cambodia）に置く。

(2) 計画内容（概要）：センターは、上智大学アンコール研修所を改組し、発展させ、これまで以上に活用するために、アジア地域の中堅幹部の人材養成を中・長期計画に基づき現場実習を中心に実施し、同時に人材養成から生み出される自国研究を援け、日本人研究者、学部・大学院学生による現地調査に基づく地域研究の促進を図る。

1) 上智大学の教育理念をアジアで実践：

本学の建学の精神である「キリスト教的ヒューマニズム」を基本に、世界を一つの家族と考え、国際化時代を先取りした教育を実践する。①アンコール・ワットでの活動は、世界・アジアに向けて、本学における国際貢献の発表の場とし、もって、本学の建学の精神を実践する。②センターは、当面、ボルポト時代に虐殺された中堅幹部の欠落を補い、とくに保存官や指導者を養成する。それがカンボジアの自立を援け、遺跡を文化資源と位置づけ、地域発展につながるように支援する。

2) 本学のアジア文化研究：

アジアに生きる人々の生活とその社会・文化を尊重し、強固な信頼関係を結び、彼らの社会を内側から理解し、暮らしや人々の顔が見える地域研究に取り組む。

3) 本学の人材養成をアジアで実践：

(1) 教育活動の拠点としての役割：①「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」を協力の哲学に掲げ、考古発掘および保存修復ができる遺跡保存官および熟練した石工の養成を実施する。②保存官候補者は、歴史学・考古学・政治学および建築学・地質学の講義を受講し、現場実習の指導を受ける。③実習生・研修生は、王立芸術大学・プノンベン大学等から積極的に受け入れる。④センターは、本学の学部、大学院の学生を受け入れ、学生が受講した講義や現場実習が単位の要件を充たしている場合には、学科長・専攻主任がこれを認定する。⑤講義および現場実習は、衛星を通じて四谷キャンパスに同時中継されることを検討する。

- (2) 研究活動の拠点としての役割：①地図や図面の作成・土器の計測・文献研究、そして広い意味の自国研究を行う。また、研究活動は、人文・社会科学、情報科学、自然・環境科学、理工科学の分野を対象とする。②センターには、数百箱におよぶ発掘出土品、数多くの修復現場写真・図面・設計図が保管され、多くの研究者にこれら資料を公開し、提供する。③シンポジウム、講演会、セミナーを開催する。④本学の教職員・学生は、研究活動と研修のため優先的に施設を使うことができる。
- (3) 国際交流の拠点としての役割：①本学の教職員・学生は、カンボジア人とともにアンコール・ワットの清掃、出土遺物の水洗い、ボランティア活動への参加、分野別の特別講義出席などにより、教育的交流を深める。②発掘・修復現場の説明会を開催する。③近隣の住民および小・中学校生徒に、土器や仏像・出土品を見学させるとともに、影絵芝居・トロット（鹿踊り）など村の無形文化財についても発表の機会を提供する。
- (4) 広報活動の拠点としての活動：①日本や東南アジアの専門家・研究者が数多く来所し、国際的な情報交換および研究活動の中心とする。調査団の活動概要（説明パンフレット）を、日本語・カンボジア語・英語・フランス語の各国語で常備する。②センターは、本学の出版物・教育・研究・国際交流の活動報告（英文）を展示し、販売する。③研究活動について、常時、マスメディア関係者と連絡をとる。
- (3) どのような人材を養成するか
- 1) 保存官・石工の養成：
10年前からの考古発掘・遺跡修復の現場実習の経験に基づき、考古・建築・保存科学系のカンボジア人研修生を受け入れ、学位取得もしくはこれに準じる学術・技術を学び国際舞台で活躍できる保存官を育成する。
- 2) 自然環境保全者の養成：
保存官・研修員・石工・作業員の中から、自然環境の保全と歴史景観を検分できる州政府官吏になる人間を育成する。熱帯雨林の伐採と乱開発を防ぎ、自然の環節に合わせた村落の発展に役立てる。
- 3) 自立農民の養成：
保存官・研修員・石工・作業員の中から、村落の生産メカニズムを検証できる自立農民を養成する。農村調査・研究を通じて、市場経済を踏まえた貧困撲滅のための新農村運度につながる事が期待される。
- 4) 研究者の養成：
保存官・研究員・石工・作業員の中から、自然（森林）・人間（村落）・文化（遺跡）を基軸に自国研究を推進する研究者を育成する。保存・学術振興・文化観光・生涯教育等の分野における専門家・研究者が輩出されることが期待される。
- 5) 文化遺産保全ボランティアの養成：
森林・村落・遺跡を守るボランティアを育成する。遺跡近隣に住む村人・サラリーマン・小中学校の教員などが、村人に文化遺産保全講座を開き、遺跡の意味・価値・重要性を講義し、

時には発掘・修復現場見学を開催し、理解を深めること（「アジア人材養成研究所センター設置の趣旨」2002年10月「グランド・レイアウト」第1期（2001年-2005年）上智学院理事会より取載）。

Ⅲ なぜ、上智大学がアンコール・ワットの修復を提案か

—ここから、平和構築に向けてアンコール・ワット修復の共同作業開始—

1. ソフィア・ミッションは戦禍に苦しむ人たちを見過ごさない

カンボジア人にとってアンコール・ワットは、今も神・仏（守護精霊）が住み続ける大きな石の祠であり、単なる遺跡ではない。篤い仏教の信仰に脈々と生き続けている聖地でもある。聖地の中心に聳えるアンコール・ワットの威容は特別の存在である。

上智大学は前述のとおり1979年から「インドシナ難民に愛の手を」の募金活動に取り組み、1980年代初めからカンボジア本土へ向け、ソフィア・ミッションを実施してきた。カンボジアは、冷戦時代のおりを受けて、1970年から1993年まで24年間にわたり政治混乱、内戦が続き、その結果、都市住民約100万人の追い出し、約150万人の知識人の虐殺、約200万人の難民流出、地雷による負傷などの大惨禍を被った。そして、1993年にやっと和平にこぎつけた。

上智大学は“Men and Women for others, with others（他者のために、他者と共に生きる）”を建学の精神に掲げ、カンボジアにおいて戦禍に苦しんでいる人たちを見過ごすわけにはいかなかった。カンボジアの人々はすべてを失い、内戦による混乱に喘いでいた。ソフィア・ミッションは困っている人を見捨てない活動である。

振り返れば私たちは4派に分かれて内戦中の1980年代からカンボジア現地へ出かけ、現地において文化復興に向けての人材養成活動を開始し、カンボジアの人たちがアンコール・ワットを自分たちの手で修復する活動を通じて、彼らが勇気と希望を取り戻すお手伝いを続けてきた。

アンコール遺跡の保存と修復事業は、とくにカンボジア人にとって民族文化アイデンティティの再構築のための事業として人材養成活動を着手した。アンコール・ワットは民族の和解にとって共通の話題であり、民族の文化共有遺産そのものであった。「カンボジア人の手による保存修復作業」は、カンボジアの人たちにとって新しい民族共生社会を再構築する共同作業と同じであった。

2. アンコール・ワットは民族の誇り —保存修復は文化復興を先導する波及効果—

カンボジアは1993年に王国として再出発することになった。その時、国家再建のために5大課題に直面していた。第1に戦争（内戦）の傷痕からの復興、第2に国際社会への復帰、第3に脱社会主義化と市場経済への移行、第4に文化アイデンティティの再確立（和解）、第5に貧困からの脱却であった。

その中でも、文化アイデンティティの再構築（和解）には、何よりも民族共有遺産のアンコール・ワットにおいて共同作業の修復事業を実施する必要がある。それは和解に向けての第一歩であった。アンコール・ワットはこれまでに和解と民族団結の「場」を提供してきた。



カンボジア国旗

とくに、アンコール・ワットは、カンボジア人が人類の文化史の文脈から自国の文化を見直し、自分の文化的独自性を再確認する手懸りとなる文化遺産であり、どの民族も自己の独自性の基礎を求めるものはその文化遺産に対してであり、その遺産の修復による学術的解明は大きな民族的誇りをその民族に与えるものである。そしてアンコール遺跡の保存・修復とその研究成果はたんに偏狭な民族主義的誇りをその民族に与えるのではなく、広く世界に開いた民族の誇りを学ぶことになるのである。

とりわけ、東南アジアの文化遺産の歴史的解明は、古代日本との関係において多くの新しい知見を私たち日本人に与えてくれる可能性がある。さらに、私たち日本人にとってアンコール・ワット研究は、カンボジアの数年に及ぶ奥深い文化とそこに住む人たちをより正しく理解する一助となる。

その先例として挙げるならば、エジプトのヌビア遺跡とボロブドゥール仏跡の保存修復事業は、保存官の人材養成と両国の学術研究を一挙に世界的水準に発展させたという波及効果を実証済みである。2016年から始まるアンコール・ワットの第2期修復事業は、カンボジア人専門家たちの手により実施されることを喜ぶたい。

3. アンコール・ワットはカンボジア民族和解に向けて文化共有遺産であった

なぜカンボジア人の手による「アンコール・ワットの保存・修復」を呼びかけたかということ、アンコール・ワットは、国旗の中にアンコール・ワット寺院のシルエットとして描かれ、掲揚してきたカンボジアの人たちに勇気と希望を呼び戻す文化遺産であったからである。前述のとおり、カンボジアはかつて24年間（1920年-1993年）にわたり4派に分かれて内戦が続き、虐殺と難民流出で大混乱を重ねてきた。この民族の和解に向けて共通の願いは「アンコール・ワットの昔に戻って」であった。

これら4派は近隣にあるアンコール時代の遺跡周辺を閉鎖したが、何ひとつ破壊は行わなかった。加えて、プノンベン国立博物館を封鎖し、収蔵庫の宝物を政治混乱から守った。アフガニスタンやイラクの博物館の盗掘とは違うのである。アンコール・ワットはやはり彼らにとって心の拠り所であった。私たちは、カンボジア人が自分たちの手でアンコール・ワットの修復ができるように提案し、誰もが賛同してくれた。私たちはカンボジア人の保存官を養成する現場研修を実施してきた、その技術交流はすでに25年が経過した。

私たちソフィア・ミッションは、カンボジア人たちの奮起をうながし、やる気に希望を託し、彼ら自身の手で修復できるように、一緒に現場研修に取り組んできたのである。

IV ソフィア・ミッションは平和構築に貢献

1. カンボジア人留学生（保存官候補）の大学院教育 —学位取得プログラムから—

(1) 3名の遺跡保存官候補が大学院入学：

上智大学大学院地域研究専攻は1997年にカンボジア人大学院留学生3名を受け入れた。内戦から和平に向かう1991年に王立芸術大学(以下、芸大)が再開され、この3名は入学した1期生、2期生であった。当時芸大では、先生不足で開講されている学科目はわずかであった。多くの先生や若手助手などが内戦で狩り出され、行方不明となり、授業学科目を埋めることができなかった。私たち上智大学教授陣は毎年8月を中心に集中講義を実施してきた。この3名の学生は保存官の幹部候補であった。彼らは日本に着くと、①生活上の日本語を学び、②英語の特訓を受け、③カンボジア文化復興に資する学位請求論文のテーマ探し、④研究方法論の構築などを抱え、前途多難な大学院入学であった。



遺跡内で保存官候補者たちへの集中講義

(2) S.J.ハウスで英語の特訓：

学位論文は英語で書かねばならなかった。しかし、彼らは芸大在学中に英語を学んでこなかった。そこで、上智大学での特訓が始まった。英語力をつけるため学内で開講している英語系の授業に出席し、朝から晩まで英語に明け暮れた。大学構内にあるイエズス会の修道院S.J.ハウスには、英語教育の先生(神父)たちが住んでおられたので、夕食後2時間の特訓をお願いした。カンボジア人留学生たちは英語で書いた修論・博論のドラフトをS.J.ハウスの先生のところへ持参し、添削を含め特訓のご指導をいただいた。これら留学生18名は全員S.J.ハウスの先生から英語の指導を、個人で6年間にわたり受けてきた。上智大学は国際大学であると同時に建学の精神である「困っている人を助ける」というソフィア・ミッションを最初にS.J.ハウスの先生方に実践いただいたのである。

(3) 研究意欲にあふれる18名の留学生：

英語による博士の学位請求論文を5年間で仕上げることは日本人の学生であっても困難である。彼らはゼロからの国づくりを背負って来日したが、英語による学位取得は至難の業であった。その陰にはカンボジア人留学生を励ましてきた先生や同級の院生たちの協力があつたことは忘れられない。上智大学が総がかりでソフィア・ミッション(国際協力)を四ッ谷キャンパスにおいて実施していたのである。大学院地域研究専攻の学位請求論文提出者は18名(博士7名、修士11名)であり、現在も19人目の留学生が挑戦している。全員がすでに母国に戻り王国政府の要職に就き活躍している。

2. アンコール・ワット西参道第1期起工式1996年 —建築技能者の研修現場から—

アンコール・ワット西参道の起工式が1996年(平成8年)8月29日午前9時に本学の太谷啓治学長が出席して、カンボジア王国シェムリアップ市で行われた。石造大伽藍アンコール・ワットは世界的に有名なアジアで最大級の寺院である。この西参道工事はカンボジア政府アンコール地域遺跡整備機構(略称国立アプサラ機構)との共同事業であり、国家再建に奔走するカンボジアの人た



アンコール・ワット西参道第1期工事

ちを励まし、ゼロから国づくりを始めた彼らを勇気づけ、波及効果が大きい民族再生事業である。

修復する西参道は、環濠をまたぐ陸橋状の参道（長さ約 200m、幅 12m）で、正面に向かって左半分に手をつけることになった。右半分は 60 年代にフランス極東学院の手で修復されたが、70 年以降の内戦で中断していた。左半分は創建当時のままで損壊の恐れがあるため、カンボジア政府が、80 年代から現地に来て人材

養成の保存・修復・調査活動に実績のある上智大学に修復を依頼してきたものである。式典には、近隣の寺院から僧約 20 人が参加し、仏式の伝統儀礼にのっとり、祝賀の古典アプサラ舞踊と民族音楽が入り、カンボジア方式で執り行われた。カンボジア政府からは国務大臣ヴァン・モニヴァン閣下、トンチャイ州知事、今川幸雄前カンボジア日本大使、それに本学の大谷啓治学長、外国諸機関関係者、調査団員などが出席し、近隣の町村の代表や住民など総勢約 500 人が列席した。

アンコール・ワットの西参道はまさしく表玄関に当たる。工期は 12 年、総工費は約 2 億円となったが、アプサラ機構が建材およびカンボジア人作業員の人件費を負担し、上智大学は募金活動を実施し、会社・団体・個人からの浄財が集められた。特にカンボジア人の保存官を養成しながら、修復工事をする西参道の現場が、NHK の「プロジェクト X」番組（2001 年 11 月 21 日（日））に取り上げられ、全国各地から称賛の手紙やメールが寄せられ、さらに現金封筒が届けられた。

保存官候補者は、石工研修生 25 名、作業員 30 名、建築学幹部研修生 5 名など合計 60 名であった。2007 年 10 月まで参道の擁壁 12 段と敷石二層には、保存官たちがラテライト（紅土石）と砂岩約 6,000 個を積み込んだ。この修復工事を通じ、カンボジア人の建築学技能を学んできた研修生は、アンコール・ワット時代の石積み技術水準の精巧さを学び、感動し、再認識した。

2007 年 11 月、西参道 200m のうち、第 1 工区 100m が 12 年に及ぶ修復工事のすえに完成し、カンボジア王国の副首相ソック・アン閣下出席のもと、近隣住民 2,400 名が集まり、竣工式が行われた。同年、カンボジア王国政府はアンコール・ワットの修復工事を担当した石工たちを国家公務員技官職に採用した。

3. 世紀の大発見—274体の仏像を地中から発掘—カンボジアの人たちが元気を取り戻す—

考古学分野の現場研修はバンテアイ・クデイ遺跡内で実施されてきた。その現場研修の 11 年目となった 2001 年に境内から 274 体の仏像が地中の埋納坑から発掘された。状況からみて、それは廃仏毀釈された仏像であった。当時の村人たちによって篤信されていた仏像そのものが破壊された。仏像の尊顔は閉眼で慈悲に満ち溢れ、高貴で美しく、10 世紀から 13 世紀頃の仏像と考えられる。これらの仏像はバンテアイ・クデイ寺院の回廊にずっと安置され、村人により灯明や供物が捧げられてきた。アンコール遺跡の存在が世界に知られてからおよそ 160 年になるが、このように仏

像が一箇所の埋納坑から大量に発掘された例は初めてであり、文字どおり世紀の大発掘となった。

大乘仏教に帰依したジャヤヴァルマン7世（1181年-1218年頃）は、アンコール王朝の中で最も数多くの仏教寺院を建立し、大繁栄をもたらした王である。その2代あとに即位したジャヤヴァルマン8世（1243年-1295年）は、ヒンドゥー教を篤信し、王位継承争いから反対派の仏教徒への見せしめ「仏教狩り」を命じたのであった。2001年に大量の廃仏が発掘されたことにより、ジャヤヴァルマン8世の統治下で廃仏毀釈が行われたのであった。このように王の命令が全国に行き届き、国内の治安が維持され、それなりの繁栄が維持されていたことが明らかになった。まさにアンコール王朝末期の歴史動向を示す物的証拠となったのである。

これまでフランス極東学院が立論したアンコール王朝末期の「建寺疲労による亡国」説を否定する物証となったのである。これら国宝の仏像が現場で実習中のカンボジア人研修生の手で発掘されたのである。この時、カンボジア国内の新聞・テレビが大々的に取り上げ、三段抜きの号外扱いであった。テレビが連日報道番組を組んでいた。まさに、カンボジア人考古学研修生の手により発掘がなされた。これまでポルポト政権下の暗い時代に苦しんできたカンボジアの人たちが文化的自負と民族的自信を取り戻すきっかけになった。2010年8月に再び6体の仏像が同じ境内から発掘された。



バンテアイ・クデイ遺跡から発掘された廃仏274体 2001年

4. シハヌーク・イオン博物館の建設 —本学のイニシアティブによる国際貢献—

2002年3月、岡田卓也氏（イオン株名誉会長）がカンボジアにおける植樹活動のためシムリアップを訪れ、アジア人材センターに一時保管していた廃仏274体を見学された。氏は仏像の尊顔の美しさに感動し、これらを展示するための博物館建設を提案。その建設費を本学に寄付くださった。博物館の用地はカンボジア政府が提供し、国立アンコール地域遺跡整備機構（略称アプサラ機構）が管理・維持をすることになった16,200㎡の敷地に2階建て（建築面積1,728㎡）の博物館が建設された。

2007年11月2日、シハモニ国王臨席のもとに博物館の落成式が挙行政され、その席上で上智大学は274体の仏像すべてを博物館に収納の上、カンボジア王国政府への移管を宣言し、同時にイオン株からはこの博物館の贈呈状がアプサラ機構へ交付された。博物館入り口正面には、カンボジア王国の国章が掲げられ、カンボジアでも最も格式の高い仏像博物館である。

5. アンコール文化遺産教育センター（Heritage Education）の開設

—地域の住民と手を携えて歴史探訪—

2011年12月、バンテアイ・クデイ遺跡内に「アンコール文化遺産教育センター」（日本外務省草の根文化無償）を開設、文化遺産啓蒙教育プロジェクトが本格的に始動した。このセンターは、

周辺住民および小学校・中学校生徒に対し自国の文化遺産への理解を深めてもらえるよう教材パネルを常設展示し、発掘現場の一部を復元（レプリカ）で公開している。また、王立芸大の研修の拠点として活用することを目的としている。

文化遺産啓蒙教育は、すでに2008年から開始され、近隣の小学校生徒・教員ら約1,200名に対して発掘現場の見学やシハヌーク・イオン博物館において写生教室を開いてきた。このセンターは、近隣住民に歓迎されており、外国人観光客との交流の場としても広く利用したいという要望が届いている。



シハヌーク・イオン博物館 2007年11月開館当時



「アンコール文化遺産教育センター」（日本外務省草の根文化無償）2012年12月開所式にて

6. 本学の学外共同研究：アンコール遺跡の環境保全プロジェクト — ISO14001認証取得—

2003年度にアンコール地域を訪れた観光客は53万名を数え、2014年度には300万名を突破した。観光客の急増に伴う環境劣化、膨大なゴミ、車両による大気汚染、未処理下水による川の水質汚染、ホテルや駐車場建設による自然林の破壊、歴史景観の消滅など、深刻な問題であり、国際社会やユネスコからは大きな懸念が示された。このような環境劣化に対処するためアプサラ機構は環境マネジメント局を新設し、2003年5月から本学の学外共同研究プロジェクトにより「国際標準化機構（ISO）」の認証取得に向け、約1,200名の職員に対して環境保全の実務研修を開始した。日本からは国際規格研究所、品質保証機構の2機関が環境保全教育に協力し、2006年3月「ISO14001



シェムリアップ川辺で夕涼みをする市民たち
ISO申請前 2003年



ISO取得に向けてMOUに調印するJQA（日本品質保証機構）代表とアプサラ総裁 Bun Narith

認証」を取得した。同年4月、アンコール・ワットにおいて認証式が行われた。アンコール地域の遺跡入場証には「ISO14001」という文字が印字されているが、世界遺産としてISO14001取得は、世界で初めてのことであり、ユネスコから高く評価されている。

7. カンボジア発上智大学21世紀 COE プログラム —アジアにおける「知」の再編成—

日本の文部科学省の21世紀 COE プログラムは、世界的な研究教育拠点の形成を目指したプログラムであり、本学は「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」(2002年-2006年)として採択となった。その採択の理由は「カンボジア、特にアンコール・ワットの歴史文化の総合調査研究・交流などの実績は評価できる。上智らしい国際性を活かし、グローバル・スタディーズの構築をさらに具体的に進められることを期待する(日本学術振興会 HP より)」であった。

アジア人材センターはアジアにある海外研究・教育拠点であり、国内外からその活動が高く評価されてきた。特に現地アジアへ職員が出張、人材養成を実施し大きな成果を挙げている。その COE の海外国際シンポはカンボジアのシェムリアップにあるアジア人材センターを会場として4年間にわたり5回開催された。



CEO 海外国際シンポ アジア人材センターにおいて開催

第1回「地域から発信するグローバル・スタディーズの方法論構築」

2002年12月27日～27日／出席者約180名(8ヵ国)

第2回「文化遺産とアイデンティティとIT(情報技術)」

2004年3月12日～14日／出席者約130名(12ヵ国)

第3回「カンボジア版地域自立型発展は可能か—小さな民と農民の声を発信させよう」

2005年2月21日～22日／出席者約120名(9ヵ国)

第4回「文化遺産と環境と観光」

2005年12月31日～06年1月1日／出席者約180名(11ヵ国)

8. 日本国文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム」(戦略的国際連携支援)

上智大学は「文化遺産教育戦略に資する国際連携の推進—熱帯アジアにおける保存官・研究者等の国際教育プログラム」(2006年-2009年)を申請し、採択された。その場所はカンボジアのアジア人材センターにおいて4年間にわたり文化遺産の保存・修復をメイン・テーマに掲げた大学院レベルの講義および現場研修(4週間)が実施された。このプログラムは本学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻内に併設され、日本で初めて国境を越えた国際「文化遺産学」の大学院教育であった。英語によるアジア文化遺産の専門家会議、併せて現場体験研修が実施された。教授陣は日本、フランス、カンボジア、ミャンマーから、大学院学生は日本、フランス、カンボジアから4

年間で約 90 名が出席し、上智大学大学院の実習認定単位が付与された。

9. 「上智大学国際化拠点整備事業（グローバル30）」—現地アジアにおける上智モデル事業—

本学は全国の国公私立 13 大学とともに「グローバル 30（国際化拠点整備事業）」（2009 年）に採択された。カンボジアのアジア人材センターは、これまでにアジア人の大学院教育研究に大きな実績があり、アジア留学関係の情報を収集し、必要があれば東南アジアの留学生受け入れの窓口となっていた。

2012 年 1 月に、中川正春文部科学大臣（当時）はじめ随員 10 人の日本政府関係者が、国際化拠点整備事業視察のため、アンコール・ワット西参道修復現場を訪れた。現地では本学大学院で学位を取得したカンボジア人 Ly Vanna（リ・ヴァナ）博士（シハヌーク・イオン博物館長）や 5 人のカンボジア人卒業生、参道の工事を担当した技官（石工職）ら 19 人が一行を出迎え、本学の 20 数年に及ぶ国際協力と人材養成の成果について彼ら自身が説明した。



中川正春文部科学大臣のアンコール・ワット西参道視察 2012年1月

建学の精神と結びついた本学のアジアにおける国際化拠点事業は、上智モデルとして世界から注目され、先駆的事业として評価されてきた。

10. 文化庁「国際協力拠点交流事業 —カンボジアにおける文化遺産保存のための拠点交流事業—」（2010年-2013年）

アジア人材センターは、文化庁から「カンボジアにおける文化遺産保存のための拠点交流事業」（2010 年-2013 年）により 4 年間にわたり約 20 名のカンボジア人学生に対する文化遺産保存修復の専門家養成プログラムを実施してきた。日本、カンボジア両国の教授陣が専門講義と実習を担当し、プログラムは第 1 回が 2010 年 7 月～9 月、第 2 回が 2011 年 7 月～9 月、第 3 回が 2011 年 12 月、第 4 回が 2013 年 7 月～9 月にわたり実施された。併せて、公開シンポジウム「International Symposium on khmerology in Phnom Penh」を 2012 年 1 月にプノンペン大学で開催された。そこには、本学で博士学位取得者らが講師を務め、約 100 人ものカンボジア人学生が受講した。

11. 文化庁「国際協力拠点交流事業 —東南アジア 5 ヶ国における文化遺産保存のための拠点交流事業—」（2014年-2015年-2016年）（略称「メコン文化遺産国際プロジェクト」）

文化庁の委託を受けて「東南アジア 5 ヶ国における文化遺産保護のための拠点交流事業（略称メコン文化遺産国際プロジェクト）」を 2014 年から開始された。その拠点会場はカンボジアに在る上智大学アジア人材養成研究センターであり、現場の交流フィールドは上智大がカンボジア人保存官候補者の研修に占有しているアンコール遺跡内のバンテアイ・クデイ寺院跡（考古系）とアンコー



メコン文化遺産国際プロジェクト開会式 2015年8月

ル・ワット（建築系）であった。

第1回目の2014年度および第2回目の2015年度はタイ・ミャンマー・ベトナム・ラオス・カンボジアの東南アジア5ヵ国から文化遺産現場の担当者43名が集まりカントリー・レポートを発表、熱気あふれる質疑応答が14日間にわたり続いた。

この交流事業の目的は、①遺跡現場の担当者同士の相互信頼関係の構築、②担当者同士のネットワークづくり、③文化遺産を活用した地域の国際協力のモデルづくり、④土着技術の再開発を通じ東南アジア版の修復の大綱づくり、⑤文化遺産分野における「南・南協力」の場を設定。日本が主導した初めての試みである。

12. アンコール・ワット修復をオール・ジャパンで応援 ―第2期工事はじまる―

アンコール・ワット西参道の修復工事の第2期工事（2016年-2020年）がアプサラ機構と共同工事としてはじまる。このたびの第2期工事には、外務省のODA（一般文化無償資金協力）として採択され、日本からすでに修復に必要な機材が現地に届いている。

実施体制は上智大学アジア人材養成研究センター（本部はシェムリアップ）とアプサラ機構が、合同で「アンコール・ワット技術交流研修委員会」（技術教育・工事指導）を設置し、協議しながら施工計画を作成し、着工していく。この技術交流研修委員会には、日本の建築学・土木工学各分野両学会の専門家が参画し、2015年3月と2016年1月に第1回、第2回「アンコール・ワット技術交流研修委員会」が上智大学で開催され、京都研修が実施された。本工事には6年未満の歳月と総事業経費約7億円が見込まれている。日本政府からは機材が供与されたが、上記のODAには現地の作業員に対する人件費と管理費、石材の購入費並びに供与された機材の燃料費等が含まれていない。

13. 結論として：アジアにおけるソフィア・ミッション

—25年間（1991年 - 2016年）の12大プロジェクト

- 1) プノンペンの王立芸術大学への集中講義と教授陣派遣（1991年-現在まで）
- 2) アジア現地に「上智大学カンボジア人材養成研究センター」の建設とアジア地域の研究拠点（1996年-現在）
- 3) アンコール遺跡現場における人材養成活動（建築学の現場研修と考古発掘の現場研修）（1991-現在まで）
- 4) 学位取得プログラム—保存官候補者の大学院教育—（1997年-現在まで）
- 5) バンテアイ・クデイ遺跡において280体の仏像発掘（2001年と2010年）
- 6) シハヌーク・イオン博物館の建設（2002年-現在開講中）
- 7) アンコール・ワット西参道第一期工事に100mを修復（1996年-2007年）
- 8) アンコール遺跡がISO（国際標準化機構）の「ISO14001（環境マネジメント）」の認証取得（2003年-2006年）
- 9) 2009年日本国外務省「草の根文化無償支援」により「アンコール文化遺産教育センター」を開設（2009年-現在）
- 10) 日本国外務省 ODA（一般文化無償資金協力）「アンコール・ワット西参道修復機材整備計画」に採択され、全機材がアンコール・ワット西参道の修復現場に到着（2015年-現在）
- 11) 国際シンポジウム「過去から未来へ、アジアにおけるカトリック教会の使命」上智大学の貢献、（上智大学創立100周年記念事業，日時：2014年3月14・15日，会場：ローマ教皇庁立グレゴリアン（Gregoriana）大学・マテオ・リッチ会議場）において Prof. Yoshiaki ISHIZAWA, International Cooperation Among Jesuit Universities in Asia, Sophia's Current Development of Human Resources in Cambodia 発表）
- 12) アンコール・ワット西参道第2期工事（西寄り100m）着工（2016年-）

参考資料

- 1) パウロ・フィステル（編）『日本のイエズス会史—再渡来後、1908年から1983年まで』（非売品）イエズス会日本管区 昭和59年（1984年）刊 pp.246-254
- 2) 上智大学『上智大学通信 創刊号～第100号（昭和43年12月～昭和56年10月）』（縮刷版）、上智大学 pp.657, 660, 662, 666, 687, 698, 713, 714, 732
- 3) *International Symposium between Past and Future, the Mission of Catholic Church in Asia: the Contribution of Sophia University on the Occasion of the 100th anniversary of Sophia University, March 14-15, 2014, Gregoriana 8, Gregorian & Biblical Press, Roma, 2015*
- 4) 遠藤宣雄・丸井雅子・三輪悟・田代亜紀子・阿部千依「調査団年表 上智大学アンコール遺跡国際調査団の50年史（日・英両文併記）」『カンボジアの文化復興』第27号（2011・2012年合併号）pp.146-181